

嘉瀬考 その一 木下 巽



わたしたちの郷土「嘉瀬」という地名は、古い文書には、河瀬・加瀬・嘉瀬などいろいろな書き表されています。

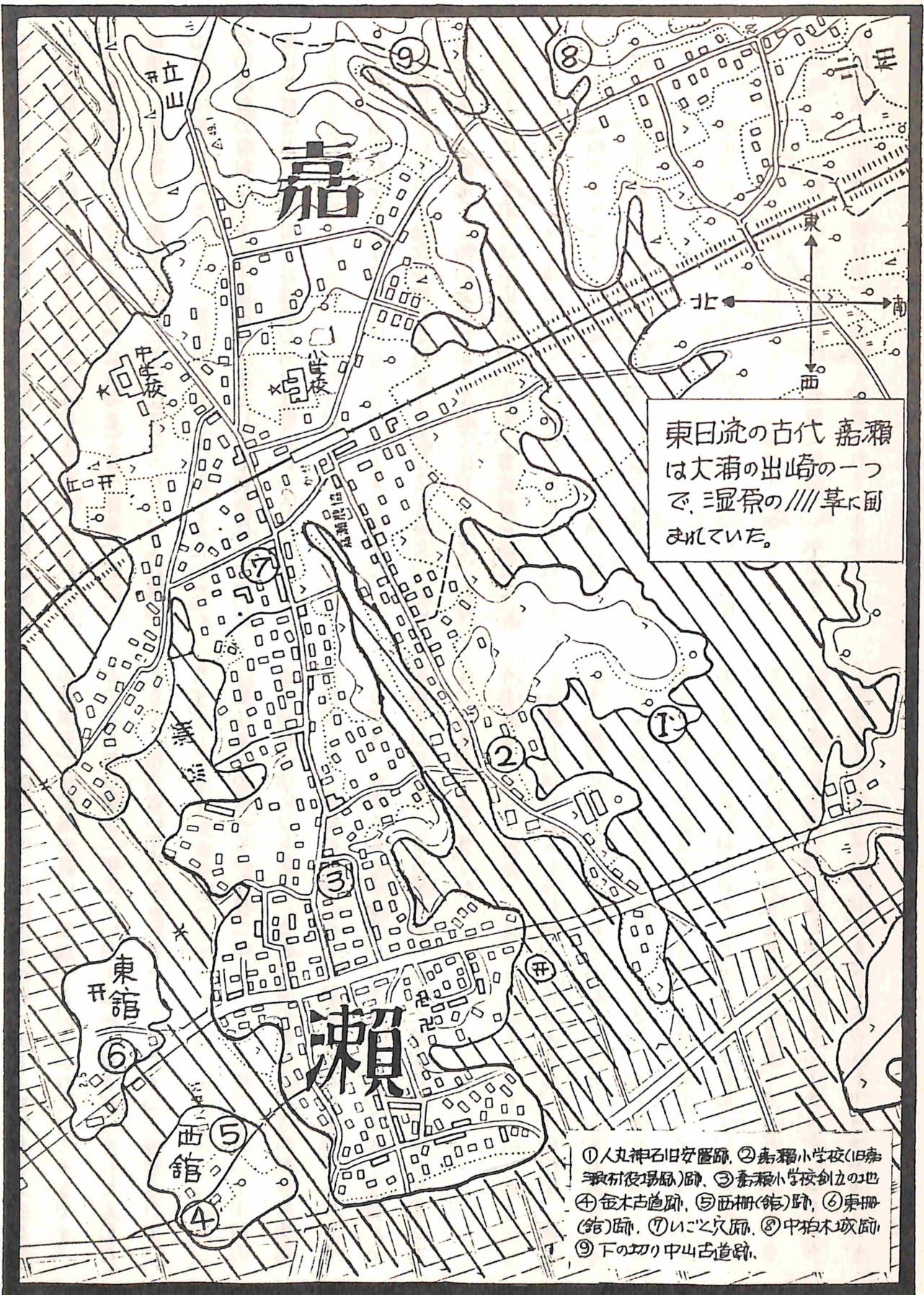
究と解明がなされ整理されつつありますので、この文章も明確になるものと期待しています。いずれにせよ、村のをおいたちをさぐる大きな手がかりになるものと信じています。

まず「東日流外三群誌」の東日流々転史の中に、「清々たる安東浦、山海の幸と景勝三峯山水相和して絶景なり。東日流六郡内外は古く遠浅なる入海にして、有間・江留間・田光・葦范・蛭范・行丘・藤崎・入間・石化崎・塩崎・浅瀬州・大浦・平河・大館・水戸崎・千貫・田野浦・河瀬・水元・藻川・鏡浦等なる浦や崎の海辺に住むる民族は阿曾部族と称し、山海の幸豊かにして衣食住に飢ゆることなし。(中略)世襲に天変地移

いたといわれます。津軽六郡は、平賀・田舎・鼻和・奥法・江流間・馬郡の六郡で、このうち奥法・江流間・馬の三郡は、今の西、北津軽郡地方が外三郡と呼ばれていました。「東日流六郡内外は古く遠浅なる入海にして」という文から、これより以前の大昔の津軽平野は一円満々たる大湖水(入江)であったことを物語っています。

起りて阿曾部一族が住いせる山麓は火を噴し、安東浦にはかに立起して陸となり、後には葦野以北のみの浦なり。残る十三の浦や崎をして十三浦と称したり。(後略)」とあり、この古文書には「河瀬」とあります。東日流外三群誌は現在かなり研

津軽平野と岩木川、そして十三瀨のなりたちの関係については専門家は次のように述べています。
「津軽平野は、岩木川の沖積作用によって生成された沖積平野である。津軽平野の標高が低い点からみても、古くは十三瀨がはるか南方にまで延び、渺々たる大湖をなしていたことが想



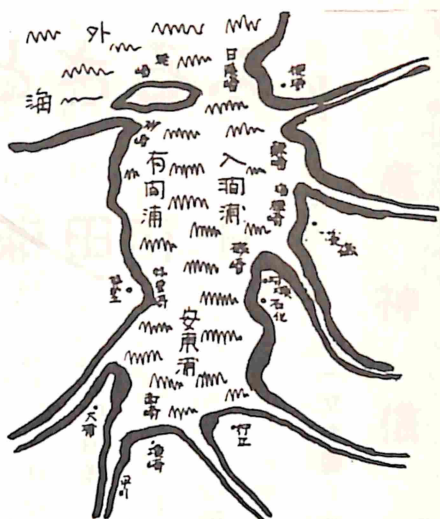
東日流の古代嘉瀬は大浦の出崎の一つで、葦原の草に囲まれていた。

- ① 人丸神石旧安置跡
- ② 嘉瀬小学校(旧嘉瀬新役場跡)
- ③ 嘉瀬小学校創立の地
- ④ 金木古道跡
- ⑤ 西棚(館)跡
- ⑥ 東棚(館)跡
- ⑦ いごの穴跡
- ⑧ 中柏木城跡
- ⑨ 下の切り中山古道跡

定される。平野周辺の遺積分布図から推して、今日の標高七メートル線がその限界であろう。これを『古十三瀨』と仮称しよう。現在の岩木川と津軽平野の姿になるまでは、津波、陥没、堆積をくりかえし、湖沼になったり、丘になったり、(註嘉瀬の地名に関係がある点)アシ原になったりということだった。今の津軽の町村は、その平坦部は、主として足利時代の中頃以降に生成され、藤崎町、妙堂崎以外は北野といわれ、見渡すかぎり茫茫とした荒野であった。それが元禄、宝永のころ、今のような村落形態を形成するようになった。」とあります。

嘉瀬については、地図を開いてみますとわかるように、村の地形は東の山麓部から西の方にむかって長くのびていて、村をつつむようにして田んぼが広がっています。等高線を結んでいくと、村全体がクジラの頭のように広い丘の上に形成されており、大きな崎のようになっていきます。したがって「端山崎」「小栗崎」という地名もこれらに因んでついたのではないかと考えられます。

また、康永二年(一三四二年)、今から約六百五十年前の頃、安倍貞季(安東氏一族)之作図を見ると、藤崎・浪岡から十三福島城へ通じる地図の中に、神宮城・飯積(飯詰)・中柏木・小田川城・忌来市(喜良市)・加瀬と記載されています。



東日流古代図

現在の津軽平野の大部分は、往古、大きな内海であった。

所。そのうち丘がだんだんと加わり小高い丘ができてきた。瀬が加わってきた土地なので、そこを加瀬と呼んでいる。また川の流れもいろいろ変化している。それを聞いて最明寺時頼は、東の日の流れる(ツガル)ところもおもしろいところだ」と、ことのほか喜んだという説話があり、それに因んで「加瀬」という地名になったという伝説です。直接に古文書を見たのではなく、郷土史の研究者から聞いた話です。たしかではありません。しかし地名に関係して、このような伝説もあるということだけでも心なごむ楽しさを与えてくれます。

このほか嘉瀬という地名については、金木郷土史によると『カセはアイヌ語から来たと思われるが、即ちカは丘、フは広の意味で、カ・フはなまって「カセ」になったらしい。カセ

同じ頃の康永二年、秋田市の松原にある「補陀落寺(安東氏の菩提寺)」の過去帳に「加瀬」と記入されているそうです。この過去帳は康永二年に古い過去帳から書き写しをしたもので、そうで、相当古い年代から記載されていたものと推定されています。

更にさかのぼって、弘長二年(一二六二年)七百二十年前の鎌倉時代の頃になります。その当時の執権最明寺時頼が陸奥国を行動して、藤崎まで来たことが最明寺日記に記録されているそうです。それらのことを書いた富士見日記の中に「加瀬」と記載されており、さらにそれに因んだ話が物語のように書かれているとのこと。それによると、

『東日流にはおもしろい所がたくさんある。その中で、湖(旧十三湖)に面したところに小高い丘がある。この丘は少し波がつよくなったりするとかくれてしまう。波が静かになったり、潮がひくと丘が見えてくる。そうするとどこからともなく人が出てきて、シジミ貝をひろったりピチピチはねている魚を手つかみにしたりする。また稲も生えているし、そこには人々が住んでいる。山の幸、海の幸が豊かなところであるが、また波がくればかくれてしまう。丘がかくれたり出たりするおもしろい

とは丘が広いという意味である』とあります。この説の方が説得性に富んでいるようです。地名というのはどこの地名もそうですが、みながはっきりせず伝説的な話が多いものですから、これからも古文書をさぐりながら浮きぼりにしたいものです。

このほか、安東一族記の中に『茲に東日流国の安部一族のゆかりのある城柵は古今を通じて左の如しとあり、その中に「嘉瀬八幡館」の記載があります。これは承暦年間より永禄年間迄に到る城跡なり』とあります。また藩政時代に入って、津軽一統志の記録の中には「嘉清」と称された時もありますが、ほとんどは「嘉瀬」になっています。

以上のようにカセの地名は、河瀬・加瀬・嘉清などいろいろですが、補陀寺の過去帳にある加瀬が古くから使われてきたのではないかと考えられます。それがいろいろの記載や書き写しの中で、いつしかもっとも安定した「嘉瀬」になったものではないかと考えています。

このように古文書を調べてみたり、村の神社・寺院の創建からみてわかることは、嘉瀬の村は相当に古くから開村されていたということです。少なくとも六百六十年くらいまで、さかのぼるものと考えられます。



ふるさとを探る(2)

—— 十和田様 —— 山中正津

九月十五日の旗日(敬老の日)に初めはじめてのフィールドワークが行われた。七月三十一日に計画されたフィールドワークが雨のため流れ、延々となり、この日になったものである。

当日の現地調査は、嘉瀬妙光庵、喜良市山十二本ヤス(神木)、小田川山湯の沢地藏尊が計画されていた。妙光庵の調査が終り、マイクロバスで喜良市字相野山の国有林内に入り、目的の十二本ヤスを観察した。一本のヒバの木から十二本の股枝が分岐して天を刺す木としてあがめられている。この木は、新しい枝が出て十三本になれば一本枯れて、常に十二本のままだという。

十二本ヤスから約三百米ほど東に十和田神社がある。十二本ヤスを初めて見る会員は、十和田神社に詣でるのもこれが最初なのである。十和田神社の境内には、モリアオガエルの棲息地として有明な池がある。水枯れの季節であるため、それは池というより水溜りであった春先には、その池に石鯀の泡の固りみたいのが沢山浮いている。それが蛙の卵の量を見て、その年の豊凶を占うのである。会員の一行は、池のほとりで早速研究討議をはじめた。

『十和田神社というのは、あちこちにあるようだが、どういう由来があるのだろうか。』

『十和田神社は、山の中に多くある事、何処の十和田様にも占場がある事、山岳信仰の一つだろうか。』

『十和田様と云えば「さんご」を打って占うところだと聞いた事がある。』

『誰か、いわれを知っている人はいないか。』

というような事で、正確には一行の中で十和田様の故事来歴を知っている者は一人も居なかった。そこで、十二本ヤスと十和田様を案内した私が十和田様を調べ、会員に報告する義務があるようであり、この一文を書く次第である。

竜神信仰

青森県百科事典に次のように記載されている。

十和田信仰Ⅱ「天保十四年(一八四三)卯、碓ヶ関大落前おとせがきの岸、崩れ落ちて水理を塞ふさぎ、水湛たえてさながら沼の如くになりました。土人(土地の人)十和田と称して参詣する者多かり、津軽方言に、山中の窪くぼみに水湛たえて沼となすもの、土人、十和田という」(平尾魯仙『谷の響』)とある。十和田湖のように、山中の凹所に水がたまった所に竜神が住むというのが信じられ、県内各地の山中の水たまりに堂社を建てて十和田様といって、その水にさんごを打って豊凶や身の幸不幸を占うのは江戸時代の中ごろから信仰されていた。とくに津軽地方に多く数十カ所を数える。代表は平川の支流、三ツ目内川の水源にあたる十和田山中の十和田神社、浅瀬石川の上流、一の渡の山中、南郡浪岡町吉野田の山中、東郡蟹田町桂淵のものが有名である。↓竜神信仰

○ ○ ○

十和田神社Ⅱ上北郡十和田湖町奥瀬、祭神は日本武尊、旧赤倉峰十和田山正一位青竜大権現、八〇七年(大同二)南蔵坊が八竜を追い出して十和田湖の主になって祭られた。というのは伝説の域を出ないが、美しい湖水は古くから山中の霊地として信仰の場にされていた。菅江真澄の遊覧記『十曲湖』(文化四

山歩き

Ⅱ一八〇七年)に、「休屋といって大ぜいの人が参詣にのぼる夏のころ、着のみ着のままでごろ寝をしたり、物忌みにこもる建物がある。……」と見えている。社殿の後の急崖を登り、鉄のはしごで湖面に下ると、散供を打つ占い場があり、豊凶、幸不幸を占う。↓十和田信仰↓散供打ち

私は、山歩きが好きで、嘉瀬山・小田川山、喜良市山、金木山など津軽山地のいわゆる中山山脈の西側の一部については、足繁く通ったものである。

山の歩道を歩きながら山ノ神の祠ほこりがあれば手を合せ、十和田神社の前を通れば礼拝してその日の無事を祈ったものであるがそれこそ信心からというよりもそこに神社があったから習慣で社(やしろ)へ向っての拍手をうつのであった。

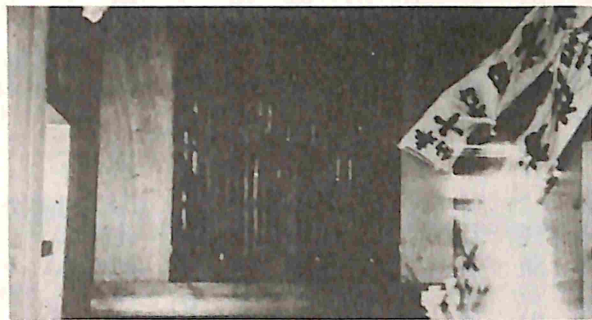
そういう事から過ぎ去ってしまえば何処に何神社があったかという事は気にも止めていなかった。それが、九月のフィールドワークで「十和田神社の由来」という宿題(誰も出したのではないが、自分で取り上げた)に向って改めて近接の市町村に建立されている十和田神社を調べる事になった。

先ず「青森県地図百科」を開き、金木・五所川原・浪岡と十和田神社の鳥居のマークを頭に叩き込んだ。

今まで見過ごしていたが、調べてみたら以外に多い。休日を
利用してカメラを肩に現地調査に向ったが、秋の日は曇天が多
く、時には雪の降った日もあり、初めての神社探しには時間が
かかった。

調査の一

喜良市相野山十和田



写真の一＝喜良市相野山十和田神社

喜良市相野山の十和田神社
(写真の一)は、会員が現地調
査を行ったので省略するが、現
在の建物は昭和五十八年旧四月
十九日改築されている。
国有林野内に、神社境内敷を
営林署から貸付を受けて建立し
てあるもので、一昨年台風で倒
壊した社は、現在のよりも一、
五倍ほど大きい建坪であった。
講中代表はいずれも喜良市の方ばかりで、中村善作、三上正
介、大橋藤太郎、桑田邦衛、米谷猛、伊丸岡政美、桑田昭一の
七人であるが、台風での倒壊後時間をかけて村人たちの浄財を
募り、現在の社が建てられたもので、近年は信者も減り、春の

豊凶占いには数人の講中代表者たちが参加するだけだという。

調査の二

空沼青龍大権現



昭和十四～五年
の頃と記憶するが
父に連れられて薪
の切り出しに東嘉
瀬山へ行ったが、
その時、現場の沢 写真二A 青龍大権現(表) 写真二B (裏)
伝えに登ってゆけば飯詰から油川へ通ずる道路があると聞き、
好奇心から登って行き、郡界の空沼まで歩いたのを憶えている。
その時、定かではないが十和田様と云われる神社の鳥居を見た
ような気がする。その記憶を頼りに十一月二十三日茸採りに行
きたいという友人と二人で飯詰山の石ノ塔沢や空沼付近の山を
探り歩いた。二〇センチほど積った雪の山中を朝九時から午後
一時まで歩いたが遂に十和田神社の鳥居を見つける事ができな
かった。

郡界にあった青森営林署生産事業所跡付近の湿地帯が空沼の
沼跡ではなかったかと思う。およそ一〇〇平方メートルほどの湿地帯
には、葦が生え、春には水芭蕉の花が咲き、また蒲の穂が立つ

を建立する。

昭和五十八年八月吉日

藤本光幸
盛喜代一
和田喜八郎
中山史跡保護会代表

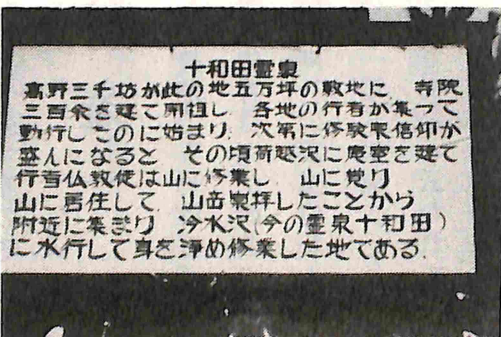
調査の三

浪岡十和田神社

青森県百科事典に出てくる代表的
な十和田信仰の地、南郡浪岡町吉野
田の十和田神社を探し求めたのは十
一月十日の事。

吉野田部落から北へ約三・五キロ、
りんご園の中を通り過ぎ、標高一〇
〇米ほどの山林の道を上って行くと
杉と唐松がうっそうと茂った山中に
小さな沢地が見えてきた。

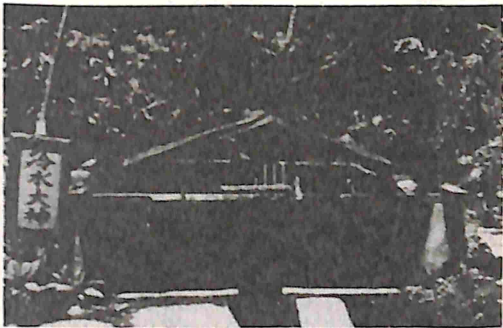
鳥居の前に、浪岡町観光協会が掲
げた案内板がある。 写真三のA 案内板



ところである。歩き疲れて、ふと見ると、油川方面へ向って左
側の郡界の道端に「空沼青龍大権現」の石碑(写真二A)が建
立されている。石碑の裏には「昭和十一年、油川、飯詰、小田
川、嘉瀬、各村講中」(写真二B)の文字が見られる。これが
嘗ての十和田神社の名残りではないかと思う。
その石碑の傍には、次のような案内板が建っている。

史跡空沼青龍大権現の由来

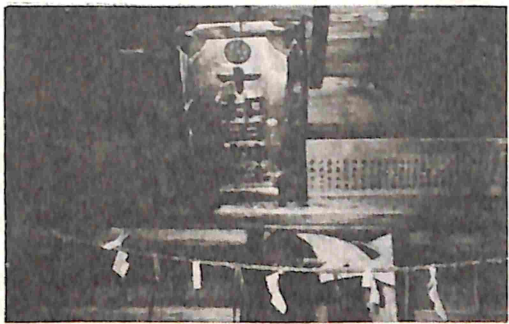
この地は修験道の山伏が密行の秘法をこらした古事
来歴がある処で、役小角仙人が大宝元年に石塔山に於
て青龍大権現の昇天する霊夢によっておとづれ中山修
験道場として一字の草堂を建立したのにはじまり、本
地の金剛蔵王垂地の青龍大権現を祀り爾来安東一族の
庇護に営まれ後世に於ては飯詰高橋城主の朝日一族、
油川城主奥瀬一族に崇拝されたが、天正年間大浦為信
が津軽一統以来地元民がこれを崇拝続けてきたが終戦
以来放置され、この神体である沼池も埋められている。
しかしながら失われゆく歴史の跡を偲ぶことも私達
に遣された教えでもあることに思いを走らせ茲に一札



写真三のB 冷水大神

高野三千坊が此の地五万坪の敷地に、寺院三百余を建て開祖し、各地の行者が集って動行したのに始まり次第に修験宗信仰が盛んになるとその頃荷越沢に庵室を建て行者仏教徒は山に修行し、山に覚り、山に居住して、山岳崇拜したことから附近に集り、冷水沢(今の霊泉十和田)に

写真三のC 十和田神社



水行して身を浄め修業した地である。(写真三のA)
この沢の一隅に冷水が湧く泉がある(写真三のB)これが十和田霊泉なのである。
神社(写真三のC)は、調査した十和田様のうちでは一番大きく、や

はり代表的な信仰の地であると感じられた。
この地から更に北へ進めば、国道一〇一号へ出る。浪岡町と五所川原市の境である防雪トンネルの北側へ通るのである。

調査の四 梵珠大滝

国道一〇一号を浪岡町から西へゆくと最初の集落は五所川原市前田野目である。この部落の真中を前田野目川が流れている。川に沿って北へ約六キロメートル、松倉神社の参道口がある。

松倉神社は梵珠山の中腹にあって、八〇一年(延暦二〇年)坂上田村麻呂が奥羽に建てた三百社の一つであると云われている

写真四のA 梵珠大滝



歴史の古い社であり、津軽三十三観音第二十五番礼所になっている。この参道口から北へ約三〇〇メートルほど行くと、道が跡絶え小さな滝につき当る。小さな滝だと思ったら、「梵珠大滝」だという。(写真四のA)

松倉神社の上り口から北へ二〇三〇メートル行けば十和田様がある、と聞いてきたが、さっぱりそれらしいものがない。今まで調べてきた十和田様の建立されてある環境は、山の中の沢や窪地で水のあるところになっているが、ここは山の中で滝が落ち川は流れているが窪地ではない。滝の上までのぼって行ったがそれらしい地形でないのであきらめて帰ると、ちょうど梵珠大滝と松倉神社参道口の間ぐらい、道端に祠(ほこら)があった。これが十和田様であったのだ。(写真四のB)



写真四のB 前田野目十和田様祠

私は、十和田神社の調査に紙数を費しすぎたようだが、十和田神社に関心を持ったのは、冒頭で書いた十和田様の由来を会員に報告するためだけではない。

十和田様は稲作文化に密接な関連があるのではないかと考えたからである。

黒石市沖浦に、貴船神社があるが高雷命(たかおおかみの

みこと)を祭神とし、十湾田様と呼ばれ、浅瀬石川流域の治水、かんがいの守護神として崇められ、雨乞い、雨止めの祈禱所として崇拜されている。
このような、水に関した神を祭ることが農村地帯にいかにかという事は、水は、生命を維持するために欠く事の出来ない重要なものの一つであるからだと思われる。太陽と水と空気は、農耕のためには何一つ欠けても生産をあげることができないものだから。

津軽に、二千年前から水稻栽培が行われていたという事実から土地の人達は、水神信仰に熱心になったのは当然の事である。

竜神様、水天宮、十和田様、雷(おがみ)

神社、水虎様、弁天様、貴船神社、川上

神社等が水神信仰による神の名称である。

神はどのようにしてその土地の人々に入って行ったのかを考えてみると、神話には「原初にアメノミナカヌシノカミがあり、つぎにタカミムスビ、カミムスビの配偶神が現われて、この造化三神が天地万物を創造した。」としている。

ふるさとを探るうえで、邑がつくられ、最初に産土神(守護神)が祭られる例からみて、神とは何なのかを考えてみる必要があると思うので、次に村上重良著の国家神道の中の一節を引

用してみる。

縄文時代以前の原始宗教の具体的な様相については、遺物、遺跡も少なく、ほとんどたどることができないが、縄文時代になると、土偶、土板、勾玉、石製の儀礼用具等の宗教に関連する出土品や、墳墓、配石遺構等の遺跡があって、原始宗教の内容をある程度推測することができる。(中略)

弥生時代のはじめ、紀元前四世紀ごろに、大陸から日本にイネづくりが伝わり、原始宗教は、イネづくりのための農耕儀礼として大きな発展をとげた。

日本の農耕社会は、イネの水田耕作を主体として、平野部と灌漑に便利な山すそ、山あいに着して集落が発達し、これらの地縁的血縁的小集団が農耕儀礼の担い手となった。原始神道の基本的性格は、この段階で成立し、三世紀後半にはじまる古墳時代にうけつがれた。古墳時代の四世紀後半には、大和朝廷による統一が進み、古代天皇制国家によって、原始神道は再編成され、統一されることになった。こうして日本全土のイネの生産を支配する天皇の宗教的権威が成立した。

原始神道の祭祀は、もっぱら共同体の農耕生産と生活の維持繁栄を目的として行われた。こんにち知られる祭祀遺跡には山岳、岩石、湖沼、島、樹木等の自然物に関係するものと、古

社の関係地に所在するものがあり、自然物にかんする遺跡では、山岳、岩石、水に拠る事例が多く、岩石の祭祀遺跡も、多く山岳と関連している。”

原始神道の宗教観念は、主として記紀その他の古文獻からたどることができる。その神観念には自然神、観念神、人格神、祖先神の各系列があり、その特徴は、大陸および南方系のイネの農耕儀礼を中心とする神々と、北アジアおよび大陸系のシヤマニズム系統の複合といふことができる。

×

×

×

原始神道は、多神教であり、その礼拝の対象は、カミ(神)とよばれるのがふつうであったが、ほかに神、霊を意味するタマ、モノ、ヌシ、その霊威や呪力をさすイツ、チ等のことばも用いられた。神々のなかでは、山岳、岩石、海、水、大地、動物物をはじめ、風、雷等の自然現象を神格化した自然神が圧倒的に多かった。自然神の主力は、農耕と関係の深い自然の諸存在と諸現象の神格化であり、これは、原始段階で成立したアニミズムと自然崇拜が、農耕儀礼の発達とともに、拡大された神格であった。オオヤマツミ(山の神)、ワタツミ(海の神)、ミクマリノカミ(水の神)等は、有力な自然神であった。

観念神は、神霊の働き、力、観念等を神格化した神であり、宿らせ、生命力を新たにするための、鎮魂の神事の基礎となった。

人格神は、支配者、英雄など特定の個人の神格化であり、祖先神とならんで、人間の神格化によってつくられた神々である。人格神はオオクニヌシのように、人間社会で、ひとりの人間として活動する神であり、神話において中心的な役割を占めた。記紀神話に登場する神々は、人格神が中心であり、自然神も人格神に吸収されたかたちで現われる場合が多い。

祖先神は、ウジガミの原型であるが、定住性のつよい水田耕作を営む共同体の祖先神であることから、各集団にとっての血縁神ないし擬制的血縁神であるとともに、地縁としての性格を帯びていた。祖先神には、ムスビの神や雷神のタケミカヅチが始祖神とされるなど、観念神、自然神が祀られた事例も少くない。”

○

○

○

以上、宗教学者の著書の一節を引用したのであるが、農耕文化にも社会生活の上からも人間は何かを信仰する事により、より強い信念と生活力が湧いてくるものようである。われわれの周囲を見れば、神がいかに多く祭られておるか得心がゆく筈である。水に關した神社の現在の金木町をみると、冒頭の喜良市山の

これらの神々は原始神道の宗教観念を示すものであった。神の働きの神格化としては、創造生成を意味するムスビの神として、タカミムスビ、カミムスビがあり、生殖の神としてイザナギ、イザナミ、腕力の神としてタチカラヲ等があった。知恵の神格化にはオモヒカネがあり、吉と凶は、ナオヒ、マガツヒの神とされた。言語にもコトダマが存在するとされていた。神の働きのなかでは、ムスビがもっとも重要であった。ムスビには、創造、生成から生殖、人間の成長、豊饒等の多様な意味がふくまれていた。”

記紀神話は、原初にアメノミナカヌシノカミがあり、つぎにタカミムスビ、カミムスビの配偶神が現われて、この造化三神が天地万物を創造したとしている。ムスビの働きとして、さらに火をつくるホムスビ、五穀を実らせるワカムスビがあった。ムスビの観念は、生殖の神秘的な力と、イネの生育、収穫を結びつけた農耕社会の原始宗教にひろく見られる観念である。この観念から、国土を拓く神、土地を守る神としてのクニタマの神の観念が成立した。

クニタマの神は、ウブスナ等の土地を守護する地縁神の原流のひとつとみられている。古代国家によって整えられた儀礼では、ムスビの観念は、神の霊を人間の肉体に触れさせて霊威を